

<コロキウム参加記>

第2回日欧地中海世界コロキウムに携わって

佐藤 昇 (東京大学)



質疑応答。左から、モーガン教授、ピット氏、上野氏、リザキス教授、ボーデン博士

上野の桜も咲きそろい出した2009年3月下旬。日欧の古代ギリシア・ローマ史研究者が東京大学山上会館に集い、3日間にわたって研究発表を行った。「第2回日欧古代地中海世界コロキウム」である。第1回は4年前、2005年のことである。桜井万里子教授（東京大学（当時）。現名誉教授）とキャサリン・モーガン Catherin Morgan 教授（ロンドン大学キングスカレッジ古典学科。現BSA館長）の尽力によりロンドン大学 Senate House で開催されたものであった。第2回となる今回は、上記2名の主催者にさらに橋場弦准教授（東京大学）を加え、場所を東京大学山上会館に移した。報告者も前回とは随分と様変わりをした（前回コメンテーターを務めて下さったコールドストリーム Coldstream 教授はこの間に亡くなっている）。「古代地中海世界における社会規範と公共圏」という共通論題の下、日欧の研究者16名が非常に興味深い報告を行った。扱う時代、トピックもバラエティに富んでいる。2007年から2008年11月までロンドン（ロンドン大学キングスカレッジ）、アテネ（BSA）に滞在していた私は、報告者として参加するばかりではなく、日欧の参加者

との事前連絡役を務め、さらに帰国後も事務一般、機器の準備など裏方として会の運営に携わることとなった。

国内の報告希望者も比較的早くから募り、欧州の研究者との交渉も事前に調整を図っていたのだが、諸々の事情から連絡がうまく取れずに、最終的に来日を断念せざるを得なかった方もおられ、また日本側でも報告を断念なさった方がおられた。残念なことではあるが、こうした事態はしばしばあることでもある。次の機会に来日、報告されることを期待したい。むしろそうしたことがありながらも16名もの報告者が得られたことは非常に喜ばしいことであった。この他、欧州からの参加者との連絡には、とりたてて大きな支障はなかった。欧州滞在中に国際学会に報告者として参加した経験が、こうした準備にも活かされたことは間違いないのだが、しかしこれは紛れもなく、参加者側がこちらの状況に配慮しつつ対応してくれたおかげである。唯一、原稿については随分苦労をした。読み上げ原稿を事前に提出するよう求めていたのだが、忙しさからなかなか提出してもらえず、遅れ気味になった。原稿は、一部には印

刷して郵送したが、基本的には、パスワードをかけてネット上にアップロードし、希望者各自にダウンロードしてもらう形式をとった。とりわけ今回のように報告者が多い場合、こうした方法は有効だろう。

欧州からの参加者が成田に到着した当日、人手が足りず、一人で何度も空港に足を運んだのも、今ではよい思い出になっている。学習院大学の秋山由加さんにも、直前になってお迎えのお手伝いをお願いした。こうした応援もあり、また飛行機の遅れなどに関しても大きな問題が生じることはなく、無事、全員がほぼ予定通りに到着することができた。

報告会に先立ち、前日 26 日には江戸東京博物館のご厚意もあって、欧州からの参加者を中心に同博物館見学ツアーが行われ、さらに夕方には歓迎の宴が開かれた。参加者及びそのパートナーに限られたささやかな会で親睦が深められた。

初日 27 日はキャサリン・モーガン教授が初期ギリシアの聖域における神殿建築について、長尾美里氏（名古屋大学大学院）がデーロス島アポローン神域の形成過程について、ヘンク・シンガー Henk Singor 准教授（ライデン大学、オランダ）がスパルタのヒッペイスについて、上野慎也氏（大妻女子大学等非常勤講師）がイソクラテース作『パナーテナイコス』について、ジョン・デイヴィス John K. Davies 教授（リヴァプール大学名誉教授）がギリシアのオイコスの公的／私的な性格について報告した（ちなみにデイヴィス教授は同時期に他に 3 本もの学会報告をこなされたという）。

翌 28 日は栗原麻子教授（大阪大学）がアテーナイの公訴について、クレア・ジャクミン Claire Jacqmin 氏（テンプル大学講師）が劣格者との結婚について、私がアテーナイの公訴取下と法廷外決着について、ヒュー・ボーデン Hugh Bowden 博士（ロンドン大学キングスカレッジ上級講師）がギリシアの密儀宗教について、松原俊文博士（早稲田大学非常勤講師）がローマの歴史叙述に

ついて、ロバート・ピット Robert Pitt 氏（BSA 副館長）がギリシアの公共建築請負について論じた。

最終 29 日は、池口守准教授（別府大学）がローマの獣肉消費について、アタナシオス・リザキス Athanasios Rizakis 教授（KERA（古代ギリシア・ローマ研究所）、アテネ）がローマ帝政下のギリシア人エリートについて、田中創氏（東京大学）がリバニオス作『プロ・テンプリス』の宗教性について、シャーロット・ルーシェ Charlotte Rouche 教授（ロンドン大学キングスカレッジ）が考古学により提示され、歪曲もされる歴史像について、浦野聡教授（立教大学）がパピルス史料からアピオン家の相続について発表した。

コロキウム前日までに必要な機器のテストが完了しなかったこともあり、パソコン、映像機器のセッティングに戸惑ってしまった。そのため第一報告の開始が遅れてしまったが、それ以外はほぼ順調に進めることができた。報告内容についていえば、個々の報告はもちろんのこと、個別に設定されたコメンテーターによる論評も非常に充実したものになった。それらに比べるとオープンに行われた質疑応答はやや物足りなかったかもしれない。そうした中でデイヴィス教授、ルーシェ教授は、字義通り、どの報告にも、建設的で刺激的なコメントや質問を投げかけて下さり、日本側では中井義明教授（同志社大学）が積極的に質問して下さった。彼らのおかげで議論の体をなした部分が随分とあり、非常に感謝している。無論、会場外で、懇親会の場で、さまざまに意見交換が行われたことは言うまでもない。



ティーブレイク。左からボーデン博士、ルーシェ教授、デイヴィス教授、デイヴィス夫人

毎日10時ごろから17時半頃まで、昼食とティーブレイクを挟みつつではあったものの、報告がみっちりと予定されていた。にもかかわらず、多くの参加者がどの報告も漏らさずに出席して下さった。と同時に、きわめてタイトなプログラムだったにも拘らず、ほぼ遅滞なく予定通りに会が進行したのは、橋場准教授の巧みな司会術によるものであり、そして何よりも報告者、コメンテーターがそれぞれきちんと時間配分を守って下さったおかげである。受付係、会場係を担当して下さった東京大学出身の若手研究者、大学院生も、的確に準備、後片付けをして下さった。

報告会の前後にはパーティーなどを通じて親交を深めることができた。初日、二日目は特に予定を立てていた訳ではないが、参加者たちを連れて、会場周辺のレストランで会食を楽しんだ。国際学会を開く際には常に参加者の食習慣（宗教上の戒律や菜食主義など）にも配慮しなければならないが、今回の参加者については特に大きな問題は生じなかった。最終日は山上会館を利用してオープンなパーティーを開いた。報告者及びそのパートナー、コメンテーター以外にも、一定数の

<旅行記>

秋、北のギリシアへ —ハルキディキ・マケドニア地方旅行記—

竹内 一博 (ギリシア政府奨学金財団・アテネ大学大学院)

2009年10月18日から26日まで、ロンドン在外研究中の高島純夫先生（東洋大学）とともに車を借り、ギリシアのハルキディキ・マケドニア地方を旅行する機会を得た。先生とのギリシア旅行は2度目で、今回は前回の経験も踏まえ、車にカーナビゲーションを付けることにした。留学前に国際運転免許を取得してこなかった私は助手席に座り、カーナビと地図、そして道路標識と格闘する旅となった。

10月18日：16日の深夜に人生初の夜行列車でアテネからブルガリアに向かった私は、首都ソフィアの友人宅に1泊してからテッサロニキに

方々が参加して下さいました。来日中だったヘンリック・ムーリツェン教授（ロンドン大学キングスカレッジ）も駆けつけて下さった。裏方でいるつもりだったところ、私もパーティーで一言話すことになってしまった。準備をしていなかったせいもあり、またすでに達成感で一杯だったこともあり、サンキューを繰り返してばかりだった。今思い返しても恥ずかしさでいっぱいになる。

個人的には、ロンドンやアテネで留学中、在外研究中に非常にお世話になった先生方に、ほんの少しばかり恩返しができるような気もしている。しかし同時に、欧州の研究者のみならず、多くの方々に支えられて何とかコロキウムが成功したことも、強く感じている。恩返しどころか、本当はこちらの方がまた一層の感謝、恩返しをしなければならぬのだと思う。コロキウムの報告は現在出版に向けて準備中とのことで、一日も早く具体化することを願っている。

追：先日、リザキス教授とともに来日されていた、夫人のイヴォンヌさんが亡くなられたとのことである。ご冥福をお祈りしたい。

入った。昼過ぎにテッサロニキ国際空港でロンドンから来た先生と合流して車を借り、ネア・ポティデアへ向かった。出発前にカーナビの不具合に気づき、急いで交換を求めたことは、旅の今後を左右する決定的瞬間だったと言えるだろう。しかし、カーナビが機能していたとしても、ギリシアのいなかのホテルには明確な住所がないこともある。この日の宿もそうで、しかもメモしていた電話番号が間違っていた。結局ホテルは見つかり、ドイツ人のオーナーが親切に対応してくれた。

10月19日：今日から本格的に旅行が始まった。まず、ネア・ポティデアで運河の南側に残る城壁